ことばの発達支援を目指す2歳児親子クラブ活動の課題と展望

広島大学　　本渡　葵

キーワード：ことば、発達、子育て支援

1.はじめに

本稿は、広島大学「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」（以下、COC 事業）の障がい者支援領域における活動の１つ「のびのびくらぶ」の取り組みの課題と展望について、参加学生へのアンケート結果をもとに考察するものである。

2.背景と問題の所在

2.1.背景

大学生による地域の子育て支援活動は、少子化や核家族化などの様々な要因を受け、近年全国的な広がりを見せている（岡田ほか 2008 など）。これらは地域にとっては大学生の力を子育て支援に活用でき、学生にとっては多様な学びを経験し、さらなる探求につなげることができる。大学は、地域の要請と学生の成長の両方に対し働きかけることが求められよう。

さて、「のびのびくらぶ」は広島大学 COC 事業障がい者支援領域における活動の１つであり、A 市と連携し育児支援・親子クラブ活動である。参加対象者は、１歳半検診時に「要経過観察」と判断された幼児（参加時１歳１０ヶ月～２歳５ヶ月頃）と、その保護者のうち、のびのびくらぶへの参加を希望する親子５組である。

活動内容の企画・準備・当日の進行は、広島大学に在籍する学生がボランティアとして携わっている[1]。学生が在籍する学部は主に教育学部であり、所属するコースは、国語文化系コース、英語文化系コース、特別支援教育学系コース、初等教育教員養成系コースなど、幅広い。

「のびのびくらぶ」は COC 事業開始した平成 25 年度に構想され、翌年の平成 26 年度に「にこにこくらぶ」として活動を始動し、本年度で 4 年目となる。当初の実施場所は、大学ではなく、地域の福祉会館を利用してものであった。平成 27 年度には「のびのびくらぶ」と名称を変更し、実施場所を大学内プレイルームに移した。平成 28 年度および平成 29 年度も大学内プレイルームにて実施している。

写真 1 活動の様子（読み聞かせ場面）

2.2.問題の所在と本稿の目的

「のびのびくらぶ」に参加する学生はボランティアとして授業や課外活動の合間を縫って参加している。これまで学生ボランティアを対象としたアンケートは実施されていなかった。そこで、本稿では、平成 28 年度分の学生ボランティアへのアンケート結果をもとに、今後の活動継続と改善に向けた考察を行う。

3.調査

3.1.方法

平成 28 年 6 月～平成 29 年 2 月に実施の「のびのびくらぶ」に参加した学生ボランティア 17 名を対象とし、質問紙による調査を行なった。自由記述以外は５件法（そう思う、少しそう思う、どちらでもない、あまりそう思わない、全くそう思わない）で回答を求めた。調査時期は平成 29 年 2 月である。

質問項目は、大きく次の 3 つから構成されている。

（１）「のびのびくらぶ」の活動そのものについて
（活動の時間、内容、量はどうだったか）

（２）「のびのびくらぶ」に参加した自分自身の活動について
（準備への取り組み、実施日の取り組み、実施日の振り返り、当日の学生スタッフの人数、参加への満足度、学生スタッフのかかわりに関して良かった点と改善点）

（３）その他
（自由記述）

3.2.倫理的配慮

アンケート調査にあたり、調査への協力は学生の自由意思であり、同意が得られなくても何ら不利益を受ける事がないこと、また、得られた情報は、「のびのびくらぶ」の活動改善目的以外には使用しないことを口頭で説明した。あわせて、調査用紙は無記名とし、個人が特定されることはないこと、およびアンケート調査への回答をもって同意したとみなす旨を口頭で説明した。

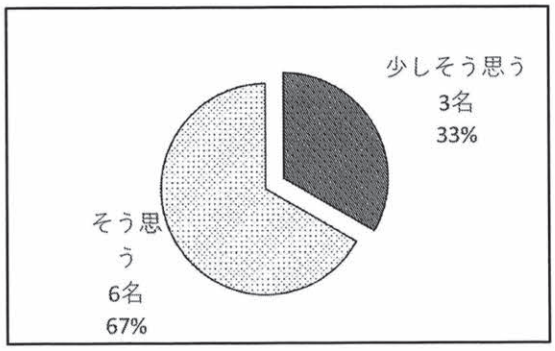
4.結果

アンケートの回収率は52.9パーセント（9名）であった。以下、質問項目と結果である。

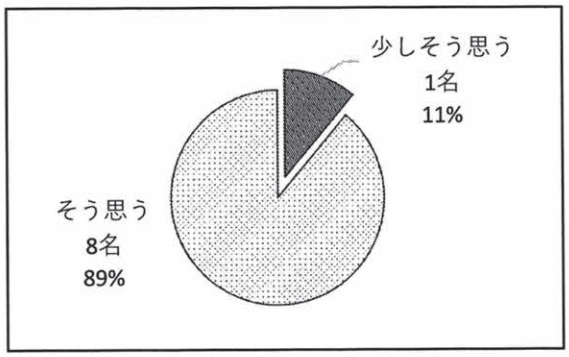
なお、4.1.（6）（7）、4.2.（6）、4.3.については、自由記述の内容を類似するグループに分類した。

4.1.「のびのびくらぶ」で感じたことについて

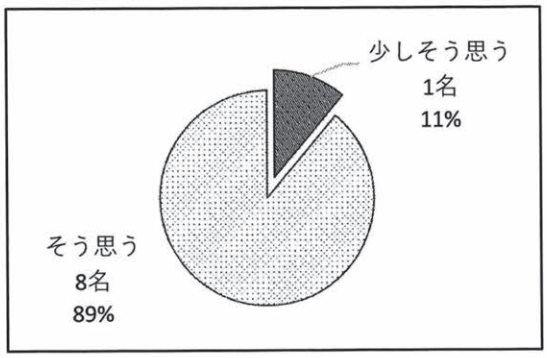
（1）活動内容は適切であったと思いますか？



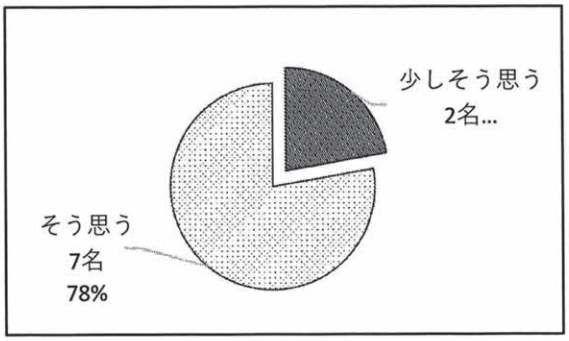
（2）活動時間は適切であったと思いますか？



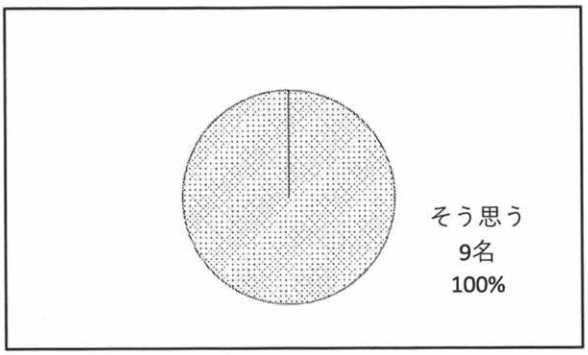
（3）活動の量は適切であったと思いますか？



（4）参加する子どもの人数（5名）は適切であったと思いますか？



（5）来年度以降もこの活動を継続した方がいいと思いますか？



（6）活動全体を通してよかった点はどこですか？

(a) 参加児の成長を促す場である点

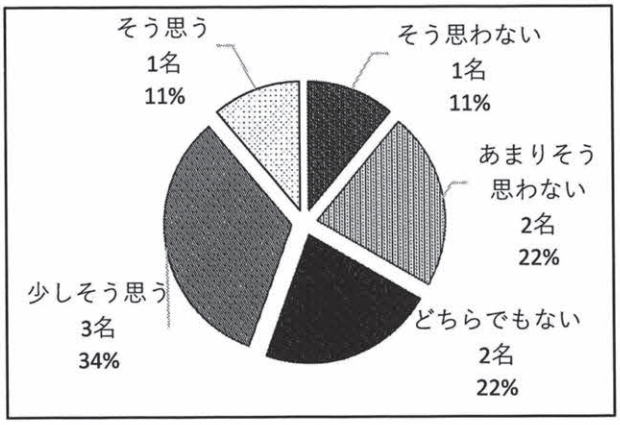
(b) 保護者の関係作りになっている点

(c) 学生にとって体験を通した学びになる点

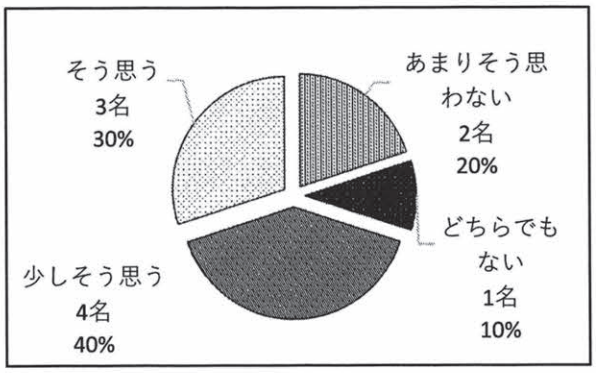
(d) 参加児の成長を共有できる点

4.2.「のびのびくらぶ」学生スタッフとしての自分自身の活動について

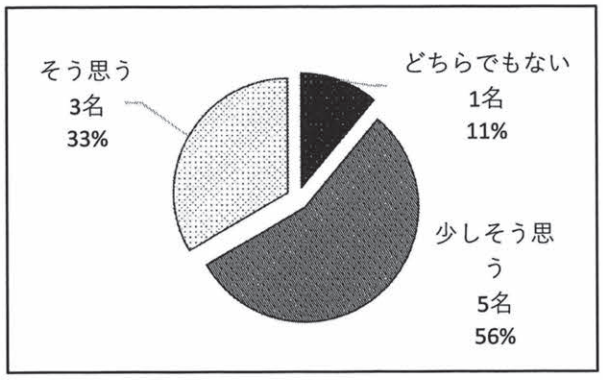
（1） 準備への取り組みは適切だったと思いますか？



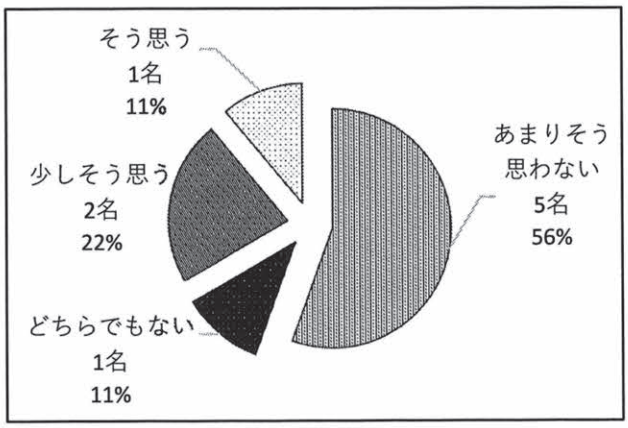
（2）　のびのびくらぶ実施日の活動への取り組みは適切だったと思いますか？



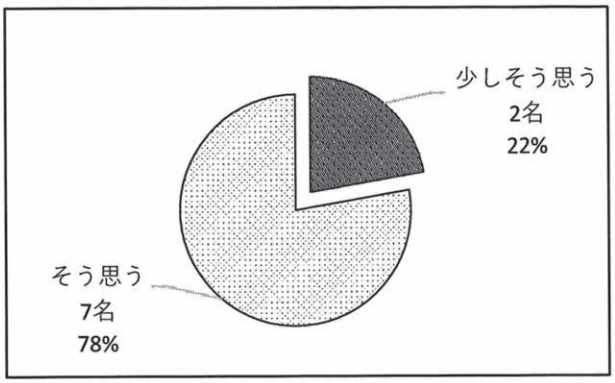
（3）当日の活動の振り返りは適切だったと思いますか？



（4）のびのびくらぶ実施日に参加する学生スタッフの人数は適切だったと思いますか？



（5）のびのびくらぶへの参加に満足していますか？



（6）学生スタッフのかかわりに関して良かった点と改善して欲しいと思う点

【良かった点】

(a) 子ども好きの人ばかりで楽しい雰囲気を作れた

(b) 振り返りの反省点を次回の活動に活かせた

(c) 自分たちで活動を考えることが、課題点を厳しく受け止めることに繋がった

【改善点】

(a) 当日の学生スタッフの人数が少ない

(b) 目的、目標の認識に個人差がある

(c) 個々の役割が不明確

(d) 事前準備に十分な時間を充てる

(e) 学生スタッフ間の情報共有

4.3.その他「のびのびくらぶ」についての意見や感想

(a) 子どもの成長をじかに見ることができた

(b) 活動の内容、流れ、自分の役割などの手引きが必要

(c) 保護者の方から感謝の言葉をもらい励みになった

(d) 知識不足がわかり学びのきっかけとなった

(e) 今後も続けるべき活動だと思った

5.考察

5.1.「のびのびくらぶ」の活動そのものに関して

回答から、活動の時間・量・参加児の人数に対して適切であると捉えていることがわかる（それぞれ89%、89%、78%）。活動内容については、67%が適切であったと回答している。

また、すべての回答者が来年度以降も活動を継続した方が良いと回答していることから、活動への何らかの期待が伺える。

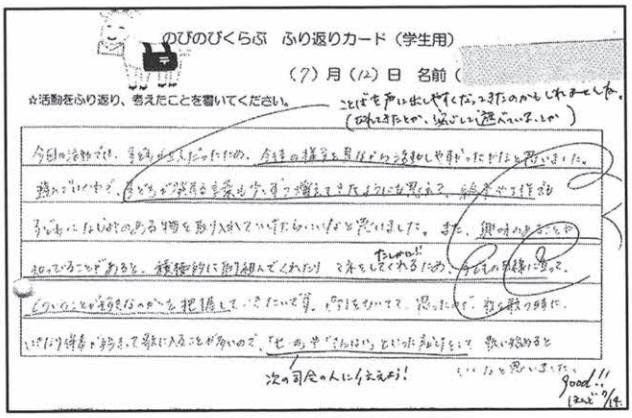
自由記述の「活動全体を通して良かった」と思う点では、「(d)子どもの成長を共有できる点」に関する意見がみられた。これは、参加学生同士で共有できるとの回答や、保護者と共有できるとの回答、その場にいる全員と共有できるとの回答などがあった。また、振り返りや事前準備の時間に、改めて「あの行動にはこんな意味があったんだね」と他の学生の意見を通して、子どもの成長を共有できたとの回答もあった。

5.2.自分自身の活動に関する回答から

次に、学生自身の活動に関する回答をみていく。「準備への取り組み」について、「適切に取り組めた」と積極的な自己評価をしている学生は45%であり、残りの55%の学生は「適切に取り組めていない」と評価している。「実施日の活動への取り組み」について、70%の学生が「適切に取り組めた」と回答している。準備、実施日の活動への取り組みについて、「適切に取り組めていない」と回答した学生は、取り組みの度合いではなく、活動そのものに参加できなかったことを「適切に取り組めなかった」と評価している可能性も考えられる。

「活動後の振り返り」について、89%の学生が「適切であった」と答え、11%の学生が「どちらでもない」と答えている。「活動後の振り返り」とは、主に次の2つである。1つは、のびのびくらぶ実施後、参加学生と自治体職員、稿者で輪になり、全員が「良かったこと、もっと良くなると思うこと」をひと言ずつ語っていく活動である。時間としては10分程度である。

もう1つは活動に参加した学生にはA5サイズの「ふり返りカード」を渡し、活動日から3日以内に稿者に提出するよう求めるものである。提出された「ふり返りカード」は稿者が赤ペンコメントを入れ、本人へ返却している。


のびのびくらぶ　ふり返りカード（学生用）

（7）月（12）日　名前（

☆活動をふり返り、考えたことを書いてください。

ことばを声に出しやすくなったのかもしれません。（成長したとか、頼もしいと感じたとか）

今日の活動では、参加者が少ないだったので、今までの様子を見ればわかる通りに、手がかかりやすかったかもしれません。

特にゲームやで、子どもが発する言葉も少しずつ増えてきたように思えて、絵本やっぱ様子も

子どもにとってなじみのある物を取り入れていけたらいいなと思いました。また、興味のあるものや

知っていることがあると、積極的に取り組んでくれたので、子どもたちの見極に役立つ。

（のびのびくらぶ）子どもたちのことを把握していただいて嬉しかったです。

いきなり準備が始まって、慣れない人が多いので、「ピ」や「さんはい」といった合図をして、歌い始めると

次の司会の人に伝えよう！

いいなと思いました。

good!!

写真2　「ふり返りカード」（学生Bによる）

「実施日に参加する学生スタッフの人数」については、56%の学生が「適切ではない」と回答している。

実際に、大学の授業や課外活動、実習、その他健康上の都合などで、学生スタッフが参加児（5名）よりも少なくなってしまう事態が何度かあった。このような時、特に配慮を必要とする参加児らは、学生スタッフの不安感を感じ取り、参加児らも不安になることがあった。

「のびのびくらぶへの参加に満足しているか」について、78%の学生が満足していると回答している。

自由記述の回答から、学生スタッフが互いを「子ども好き」と認識していることや、活動の計画・実施に対する責任感を持っていることがうかがえる。

一方、改善点として学生スタッフの確保、事前準備の時間が不足していること、学生スタッフの役割意識の不足など多くのことが挙げられている。

5.3.その他の回答から

活動に関する意見・感想としては、役割や活動の流れを明確にするための手引きが必要だという意見、実際に参加児とかかわることで、自分の知識不足に気づき、新たな学びにつながったという意見、保護者からの言葉が励みになったという意見などがあった。

5.4.小括−リフレクションに焦点を当てて−

学生は、臨床的な活動に参加することで、活動の多くの瞬間から何かを感じ取り、自身のふり返りや今後の学びにつなげていることがうかがえる。

学生らは活動に意義を感じていると思われる一方、自己評価が低い点は検討が必要である。同時に、学生間の連携、モチベーションの維持にも取り組みたい。

ここでは、今後につなげる1つの手がかりとして、リフレクションの方法を検討したい。学生らは、活動を通した経験からそれぞれに何かを学んでいる。「経験から学ぶために必要なプロセス」を、今野（2017）はKolb(1984)をもとに次のように示す。なお、例は、授業を行なう大学教員の例である。

表1「経験から学ぶプロセス」[2]

① 具体的経験　（例：日々の授業）
↓
② 内省的観察　（例：他者からの意見、授業検討会、授業日誌など）
↓
③ 抽象的概念化　（例：次に活かせるように、エッセンスを抽出する。自分なりの仮説や理論。

次の授業に向けた対応策のレパートリーを蓄える）

↓

④ 能動的実践　　（例：実際に活かす）

↓

具体的経験（以下ループ）

本活動における学生の学びを位置づけると、次のようになる。

①具体的経験（活動）
②内省的観察（実施後のふり返り、ふり返りカード）
③抽象的概念化
④能動的実践（次回の活動）

↓

具体的経験（活動）

改めて本活動での学生や稿者による学生への働きかけを顧みると、③抽象的概念化が十分でなかったように思われる。

6. 次年度以降に向けて

6. 1. 課題

学生の事前準備時間の確保、学生スタッフの確保について改善策を検討する必要がある。成績評価の対象とならない活動であること、ボランティアであることであることを踏まえ、学生のモチベーション維持についても検討したい。

また、今回は学生のアンケート結果のみをもとに考察を試みたが、参加した保護者を対象としたアンケート結果とのすり合わせも必要であろう。

6. 2. 展望

Gibbs（1998）の「リフレクティブサイクル」による、リフレクションのプロセスが以下である。

今野（2017）によれば、ふり返りを促すために、「Evaluation（評価）」や「Analysis（分析）」が出てくるような声かけをする必要があるという。評価、分析を飛ばして、「Action Plan（行動計画）」が出てきた際は、「なぜそう考えるのか」を言語化させる（すなわち、Feelings,Evaluation,Analysis,Conclusion に立ち戻らせること）ことが必要であるという。

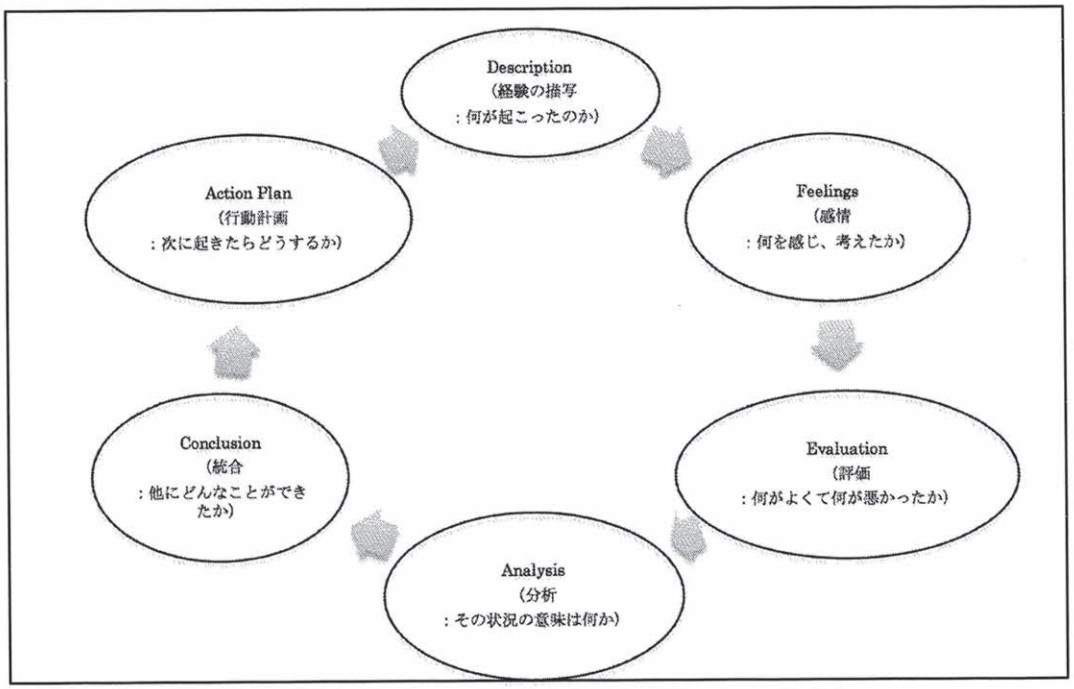


図　1 Gibbs（1998）の「リフレクティブサイクル」（安藤他、2008p.48をもとに稿者作成）

また、リフレクションの形態には次のようなものがあるという（今野 2017）。

【リフレクションの形態】

・自己リフレクション

（一人でふり返る方法。主観にとらわれすぎ、問題解決の指針が得られにくい可能性。

・対話リフレクション

（1～２人の相手を伴いふり返る方法。対話相手の主観の押し付けや誘導がないように配慮が必要。）

・集団リフレクション

（グループを構成し、議論によるふり返る方法。場所や時間の制約、日常的な実施が困難。）

これまで不足していたと思われる、ふり返りの「抽象的概念化」の充足を、どのような方法で行うか、上記【リフレクションの形態】をもとに検討をしていきたい。

また、「リフレクティブサイクル」では十分に光を当てることができない面もある。個人のサイクルの「外」からの侵入、サイクルの「外」への進出が必要であると考える。この点に関しては、さらに検討が必要であるため、論を別に譲る。

今後参加児、保護者、学生にとってさらに意味のある活動を展開していきたいと考える。

【註】

[1] 活動の詳細については本渡（2017）ですでに論じている。

[2] 今野文子（2017）「リフレクションの理論と実践–効果的な Teaching&Learning のために–」HirodaiTA 公開セミナー資料（2017 年 6 月 20 日）

【引用参考文献】

岡田由香、髙橋弘子、佐久間清美、金尾洋治、山口江利子、神谷摂子、緒方京、志村千鶴子、大林陽子（2008）「大学を拠点とした子育て支援の取り組み–大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告–」愛知県立看護大学紀要、Vol.14、pp.113-120

安藤敬子、古庄夏香、原百合、青山和子、窪田恵子、小田正枝（2008）「基礎看護実習の記録における看護専門職としての思考に注目した研究–リフレクティブサイクルを用いて–」西南女学院大学紀要 Vol.12,pp.47-54

東北大学高度教養教育・学生支援機構大学教育支援センター（2016）「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点平成 27 年度事業報告書」

本渡葵（2017）「２歳児対象の親子クラブでの絵本を用いた活動に関する考察–「共同注意」に伴う言語獲得を意図して–」国語教育思想研究第 14 号、pp,45-51

付記

本稿は『平成 28 年度 COC 事業障がい者支援領域成果報告書』における「のびのびくらぶアンケート」調査結果に考察を試みたものです。本調査にご協力いただいた学生ボランティアの皆様、および活動を支援いただいた多くの方々に感謝いたします。